

シューベルトのピアノ三重奏曲

ピアノ三重奏曲 第 1 番

自筆譜が失われているため定かではないが、1827～28年に書かれたとされる。全4楽章構成で、シューベルト最晩年の充実ぶりが凝縮された作品である。第1楽章はソナタ形式。冒頭の第1主題からシューベルトの本領である抒情的な旋律が歌いあげられ、第2主題もピアノの分散和音のうえにチェロが甘美な旋律を奏でる。展開部ではこれら2つの主題が転調を繰り返して発展し、主調による再現部を経て、コーダに至る。第2楽章は三部形式。ゆったりとした旋律がチェロからヴァイオリン、ピアノへと受け継がれ、変奏風に発展していく。ハ短調の中間部では、シンコペーションの不安定なリズムにより、ほの暗い感情が誘い出されるが、すぐ穏やかにたゆたう旋律へと戻っていく。シューマンはこの緩徐楽章について「数々の快い夢」であり、「美しい人間の感情が波のように上下している」と評している。第3楽章は躍動的かつ軽快なスケルツォ。トリオでは弦が伸びやかな旋律を朗々と歌う。ロンド形式の第4楽章では、シューベルトならではの目まぐるしく移り変わるリズムと転調の妙を堪能できる。最後は穏やかに消え行くと思いきや、強奏で力強く全曲を締める。

ピアノ三重奏曲 第 2 番

1827年に作曲されたピアノ三重奏曲第2番は、シューマンによって「男性的かつドラマティック」と評された作品。力強い3つの楽器のユニゾンで始まる第1楽章はソナタ形式で、いくつかの主題が積み重ねられていく。第2楽章は悲劇的な性格を帯びたハ短調で、ピアノの行進曲風のリズムに乗せて、チェロが孤高の旋律を奏でる。第3楽章は、軽やかなスケルツォ。変幻自在に移り変わる調とリズムの鮮やかな手際を堪能でき、明るく活気に満ちたなかにも、ふと影がさすところがシューベルトらしい。第4楽章は悦ばしい気分には支配されているが、様々な楽想が組み合わされた複雑な構造となっている。第2楽章からの引用主題が明暗のコントラストをもたらし、音楽の奔放さを駆り立てていく。最後は取り戻した明るさが輝きを増して、曲を締めくくる。